

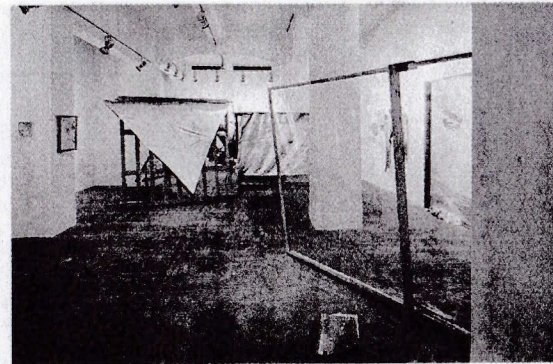
2013年(平成25年)3月14日(木曜日)

# ART REVIEW

身近に潜む「美」の発見。毎月第2木曜日に掲載予定です。

小説家  
平野啓一郎が見た美術展

## 「小林正人+杉戸洋」



写真・木奥恵三 ガallery-αM提供

カンヴァス上に、二人同時に即興的に筆を走らせるという方法を試みている。

絵画でも、ルーベンスのように、工房で分業体制で絵を描くのも一つの可能性だが、個性的な作家同士が、対等な立場で制作する際の「ケミストリー」には、もっと新鮮な相互作用への期待がある。

小林正人氏が以前から取り組んできたカンヴァスを不定型な木枠に緩んだ状態で留め、面としての絵画を三次元化する手法は、この共同作用にふしぎなエロティシズムを添えていた。

会場に足を踏み入れると、視界の右に展示されている作品から、左に向かって、次第にカンヴァスが動的になり、その最奥には最も荒々しい、一種、廃虚的な作品が控えている。

抽象性の中にも、金髪の全裸の女性が、水に飛び込んでいるような絵から、オフィリア的に水に浮かんでいるらしい絵への展開といった時間性もあり、その変化には、ピンと張られたベッドのシートが次第に乱れてゆくような生々しさがあつた。床に散らかった白い布は、脱ぎ捨てられた衣服を連想させた。

本展では、二つの基本的な問題を、一度に考えさせられる。  
絵画は、依然として一人で描くべきものなのか？  
そして、カンヴァスは、ピンと張られているべきなのか？  
いずれも、そう言われると、素朴な話のようだが、作品を通じて、問いとして成立させるのは容易ではない。  
コラボレーションが人を興奮させるというのは、音楽の世界を見ているとわかりやすい。晩年、暇さえあれば絵を描いていたマイルス・デイヴィスは、そうした音楽家らしい発想で、ジョージ・ゲルバードという女性アーティストと、一枚の

### クロスボーダーレビュー REVIEW

クロスボーダーレビュー  
REVIEW  
ストと、一枚の

### Selections

美術

▶絵画、それを愛と呼ぶことにしよう

vol.1.9 小林正人+杉戸洋

ギャラリーαM (アルファエム) (東京都千代田区東神田1の2の1103・5829・9109) 3月23日まで、日月祝休

絵画をテーマに美術作家10人が連続で開く展覧会シリーズの最終回。小林と杉戸は変形カンバスやガラス、油彩や水彩など様々な素材を使い、共同制作した絵を見せる。※REVIEW参照